

第4回砺波市立学校のあり方検討委員会 議事録（概要）

- 1 開催日時 令和3年7月26日（月） 午後3時00分～午後4時45分
- 2 開催場所 砺波市役所 小ホール
- 3 出席委員の氏名（50音順 敬称略）
井上 五三男、久保田 晃克、笹田 茂樹、高田 治生、竹山 美紀、丹羽 範夫、樋掛 恵美、
藤井 法子、藪 道子、吉田 快、吉田 直人
- 4 欠席委員の氏名（50音順 敬称略）
金平 正、廣瀬 敬一
- 5 事務局の氏名
白江 勉（教育長）、構 富士雄（事務局長）、河合 実（教育総務課長）、
肥田 啓生（教育総務課主幹）、小谷内 智信（教育総務課主幹）、片山 智遥（教育総務課主事）

6 委員会次第

1 開会
2 委員長あいさつ
3 委員紹介
4 議事
(1) 第1回から第3回までのまとめについて
(2) その他参考
5 閉会

7 委員会の要旨

委員長	<委員長あいさつ> 本検討委員会も今年で2年目となりました。新しい方をメンバーに加え、ご自由に活発にご意見をいただけたらと思います。ご協力よろしくお願いいたします。
教育総務課長	<委員紹介>
事務局	<議事（1）第1回から第3回までのまとめについて 説明>
教育総務課長	砺波市の人口のグラフは、あくまで実際の出生数をスライドさせた数となっている。砺波市は転入者がいるので、グラフよりは若干人数が増えることを期待したい。
議長	出生数を基にカウントしており、よそからの転入の数は入っていないので、これからもう少し増える傾向があるかもしれない。また、事務局からの説明の中でもあったように、今後35人学級が国の方針で導入されていけばクラス数が若干増える傾向となるが、砺波市ではそれほど増えないというグラフになっている。
委員	ここ1、2年ほど、来年も続くと思うが、出生数が極端に落ちている。このままずっとそれが続くと、大変なことになる。それをどうにかカバーしないと、学校を小さくせざるを得なくなる。そうならないようにどのような手立てがあるかを考えなければならない。 近所のお寺の息子が県外おり、家族が息子を帰そうということで地元に戻したが、そうすると自動的に奥さんや子どもが来る。そのような形で転入があればどうか

- なりそうだが、そう簡単にはいかない。みなさんはどう思うか。
- 議長 今のお話は、どんどん人口と子どもが減る中で、地域として考えていかなければならない問題だから、意見をもらえればという主旨。
- 委員 学校は地域の防災拠点となっているが、0歳児が263人しかいないと、それが危うくなるのかなと心配になる。庄南小学校下では、中野幼稚園がなくなり寂しい。万が一小学校もなくなるといことになれば、地域的にガクッときてしまう。
- 議長 今のお話は一番の心配事で、この委員会で検討していかなければならない問題である。小規模校だからなくしてしまってもいいのかという話は、考えなければならない。
- 委員 この検討委員会は、人口減少などを検討する委員会ということではないか。
- 議長 人口減少に対応した砺波市の学校のあり方を検討していくという会。
- 事務局長 この検討委員会はあくまで学校の適正規模・適正配置についての素案をまとめるものである。先ほど委員からあった人口減少に歯止めがかからないかという話に関しては、総合計画後期計画を現在策定作業中であり、その中で人口減少対策については、当然明確に計画づくりをしていくつもりである。その中で、市ではとなみ暮らし応援プロジェクトという新たな人口増対策に取り組んでおり、それが人口減少対策の一助となると考え、進めている。これは今年度から進めている事業で、これまで砺波市では転入者に対して現金を交付することはなかったが、隣接する各市ではそのような取組を進められており、魅力ある砺波市において人口減少に歯止めをかけるためにも、現金給付というものに取り組んだところである。これが功を奏して、今後この現象に歯止めがかかるかとも考えているが、そればかりではない。現在、般若地域では宅地造成が進められ、市役所の東側でも新たな造成が進められているという状況であり、砺波市にとって魅力の発信につながっていると思っている。そういった中で、さらに人口減少対策に取り組んでまいりたいと考えている。
- 委員 昨年から検討委員会に参加させていただいて感じたのは、ようやく背景を知ることができたかなということ。そもそも現状がわからなかったが、昨年何回か議論をし、小規模校・適正規模校の小学校と中学校の様子を見て、今ようやく状況がわかったという状態だと思う。今後それをどのように対策していくかを検討していかなければならないだろうと思って来たが、個人的には1学年1クラスというのは寂しいという思いがある。資料にもあるが、競争がないということと、最初にできた人間関係が最後まで続くということが、どうしても子どもたちにとってかわいそうかなと思う。1学年1クラスではなく、少なくとも2クラスという配置にさせていただきたいと感じた。
- 委員 小学校で徐々に人数が減っていくのは、市の南側である。鷹栖小、砺波南部小、庄南小、庄東小、庄川小のあたりが徐々に児童数が減っていく。中学校は、般若中と庄川中が減っていく。校区を変更してもいいという話が以前あったが、例えば庄東地区や庄川地区では、小中一貫型の学校をつくるかどうかや、小学校では鷹栖小と砺波南部小を統廃合といった形で進めたらどうかというように踏み込んで考えていかなないと、この検討委員会の存在意義がないように思う。いい悪いはまだわからないが、議論を重ねていくべきである。
- 委員 いつも悩んでいるのは、砺波市立学校のあり方について、委員としては砺波市全体の地域を見て、小規模校よりは適正規模校の方がいいのかなというように考えていかなければならないと思いつつも、地元の声も聞こえてくるということ。鷹栖小学校の例を説明すると、令和5年度で創立150周年を迎える。鷹栖村という地区に一つの小学校があって、そして今も小規模校と言われながら存在している。

創校当時から、1学年1クラスで、45人学級の時代も1クラス、40人学級の頃に40数名のときは2クラスの時代もあったが、1学年1クラスですっきりしている。1地区1校区として地域が成り立ってきているという面がある。そして、出町中学校へ行くと人間関係が広がり、その中でまた刺激を受けあう。鷹栖の子どもたちはずっと150年の歴史の中でこのように育ってきている。例えば統廃合などをして、そうすればまた違う環境の中で育っていくのだろうが、地域が学校を中心にひとつの校区としてまとまっているという現状があるため、複式学級にならない限りは20数人から10数人だったとしても、何とか存続できないものかというのが地域の声としてある。

一方で、1人の委員として砺波市を見たときに、3クラス程度の規模の小学校へ行くと、子どもたちにとってもだが、先生方の職場環境としても適正と感じた。市として、地域の特性を考えていくべきではないか。適正規模だけで考えていくというのはどうかと思う。

議長

二つの立場から見て、両方の思いがあるというのがよくわかった。地区の小学校は残して欲しいという願いがある方はたくさんいるだろうし、国の適正規模というものがあるが、小学校と中学校で違うのではないかという考え方も出てくるだろう。第1回から参加しており、一つの方向性としては、適正規模校が望ましいというような話が委員の中でのおおむねの傾向ではないかと思っており、私自身もそう感じている。しかし、地域の中での学校という存在、小規模校のよさというものもある。全体を見渡したときに、人口減少という中でこのままにしておけば、将来的には全てが小規模校になってしまう。この検討委員会は、10年先を見据えているのではなくて、もっと長いスパンを見ているのであろうと思う。

委員

では、どうしていくべきかということだが、適正規模を維持するのであれば、学校のあり方だけでなくもう少し広く、商工業の誘致から魅力あるまちづくり、教育の質、安心して都会から移住し家を構えてもらうというようなことが必要。

淡路島に本社を移転した企業を例に挙げる。その際に、都市部の子どもがいる方が一番悩まれたのは教育の質だった。そこで、淡路島の自治体で教育の質を考え、企業としてもそれを要望していき、移住する方が安心して家を移動できる、そこで子育てができるというようにトライしているということを知った。

砺波市においても、全ての学校が耐震化されたということで、適正規模校も小規模校もあるべきだと思うし、もう一つは人口そのものをどう増やすかということも同時に考えるべきだろうと思う。そのときに、一番親が気になっているのが、子どもの教育環境であるので、ここをきっちり整備することで、人口が増えていく、質の高い教育が砺波市に行き渡るということで、相乗効果が出てくると思う。

今からの世の中、ある場所に企業ができれば一瞬そこに子どもや世帯が増えるが、10年後を考えるとその地区の学校の入学は減る。そして、またどこかに商業施設ができれば、そこに人口が増える。しかし、10年～15年後にはまた人口が減るということになっていくので、適正規模校を維持する、そして魅力ある小規模校もつくるという流れの中では、やはりどう子どもの移動手段をつくるかということが大事になってくるのではないか。ある半径を超えた場所に子どもが移動するというのは、時間的・体力的・気候的に限界があるというのは見えている。子どもがより遠くに移動できる環境をどう無駄なくつくるかが、極めて大事だと思う。

適正規模校が適正だと言っているのは大人の論理であって、子どもにとってはマンツーマンなど小規模な環境で向き合って学びをすることによって伸びる可能性もあるので、自然的に小規模校になったとしても、それは政策的な小規模校と捉え、基

本は適正規模校という形とする。

人口はどんどん移り変わる。企業や商業施設も発展とともに移り変わるわけだが、5年～10年のスパンで見るとまた見直ししなければならないので、どう無駄なく移動できる環境をつくるかということと、防災や地域とどう融合させていくかということが大事になってくる。

この検討委員会で、適正規模校がいいのだろうということは方向性として出てきていると思うので、どう実現するかという段階へ移っていくべきである。その中で、移動手段というものにぜひフューチャーしていただき、どうあるべきかということを考えていただきたい。また、この検討委員会では協議できないが、砺波市の魅力あるまちづくりの中に、教育や先生の質というものも含めてどうあるべきかということや、企業誘致なども同時に考えなければならないと思う。

議長

今の話でとても大事なことは、魅力あるまちづくりのためには、規模だけではなく教育の質の問題があるということ。いかにいい教育を子どもたちに提供していくかということが、魅力あるまちづくりにつながっていく。適正規模を基準にしつつも、魅力ある小規模校をつくっていくべきではないかということと、子どもたちはスクールバスで移動することになるのではないかと思うが、通える範囲というのはこちらで想定していかなければならないので、移動手段を考えていくうえでも、どのように学校の規模を全体として見渡していくかということは大切である。

委員

小規模校に通わせたくて通わせているわけではないし、それがいいと思っている人もいれば、大きい学校に通わせたいという人もいる。やはり住んでいるところがその場所だから、その学校に行くしかないという選択になってくる。逆に、出町小学校など人数が多い学校に子どもを通わせている保護者は、もしかしたらもう少し小規模なところへ通わせたいと思っているかもしれない。自由度、選択肢を持たせるように市として考えていけばいいのではないか。

そして、そうなったときに、送り迎えなどの親の負担が出てくるので、交通手段なども考えていくべきだと思う。庄東地区は保育所も一択になっており、土曜保育があるが、小学校になった時点で学童は土曜日がないので、土曜日が休みになる仕事に変えなければならないという小学校の壁のようなものがある。親の働き方も含めて市として考えていってもらえればと思う。

議長

選択肢がないから、ここにしか通えない。そして、小学校に上がると土曜日に預けられない。選択肢を増やすという意味で、特認校制度というものがある。南砺市で義務教育学校ができるときに、他の地区からも通えるのがいいのではないかという議論があったと聞いている。最初のうちは、他の地区から行かせるべきではないという意見があり、子どもたちを取られる感覚があったようで当面見送りになったが、最終的に何年か経ってから他の地区からも行けるようにするという話を聞いたことがある。

委員

今回初めて検討委員会に参加した。数値を見ての感想を述べさせていただく。子どもの数が減っていくというのは聞いていた話だが、具体的な子どもの数と学級数を示されると愕然とした。相当な減り方である。

14ページに示されている市内小学校の普通級の推移についてだが、初めて勤めた学校である庄東小学校の例を挙げる。30数年前の話である。グラフによると平成22年度には9学級だった。そのあと、7～10学級を推移していて、令和9年度には6学級になってしまうという話である。私が初めて勤務をした30数年前は、各学年すべて3学級あり、学校全体で18学級あった。それが6学級になってしまうということで、大変な減り方だと思う。他の学校も同じようなことが言える。

次に、3ページの13歳の人数と0歳の人数の比較についてだが、人数が半分になってしまうということが読み取れる。国から示された35人学級ということで考えると、例えば280人子どもがいたときに8校に均等に振り分けると、全ての学校が35人の学級一つの学校になる。そういう状況まで来ているということがこのグラフでわかる。さらに、0歳が263人であるが、行政の方で何とかされたとしてもそれほど増加が期待できないこともあり、さらに減っていくことはもう見えているのではないかとということが読み取れる。

子どもの数や学級数が減っていくことは間違いないという中で、先生の数で考えたいと思うが、例えば1つの学年に3学級あれば担任が3人いる。それに対して、1学年1学級の場合は、担任の数が1人。このような場合に、先生たちの思いはどうなるかということだが、各学年1学級だと、新規採用された初めての先生も学年を1人で見るということになる。3学級あれば、わからないことがあれば隣の学級の先生に相談しながら進めていくことができるが、1学年1学級だと誰に聞いていいのかわからないという状況が生まれやすい。教員の適正規模という面で見たとくにも、複数学級がある方がよい教育につながるのではないかとこの思いは持っている。保護者の代表として耳にした話だが、1学級の人数は少ないほどいいと考えている保護者が多くいる。35人学級というのは、保護者の立場からするとありがたい話。各小中学校の人口のグラフを見ていると、少ないところは少ないというのが見える。例えば鷹栖小学校は令和9年に117名ということになっているが、交通手段等を工夫することによって、出町小学校の子どもたちが鷹栖小学校に通えるということも考えられる。このようなことも踏まえて話をしていけばいいと思う。

委員

議長

国の施策で35人学級が進められるわけだが、人数が少なければ少ないほど子どもひとりひとりに目が行き届きやすいというメリットが大きくなる。

昨年度視察に行き、25人ほどの学級がよい雰囲気であったというのが印象に残っているが、市独自の施策で学級の人数を減らすということになると、非常に人件費がかかるため、なかなか難しい。

先ほどの話は、現在の出町小学校区の子どもの一部が鷹栖小学校に通うということか。

委員

議長

然り。

校区割りを変更することも当然考えられる。ただ、地域のことを考慮しながらということになる。

委員

リモート会議というものがあるが、離れた2クラスが同じ授業を同時に受けることは技術的に可能か。少ない人数のままの環境で教育の質を同じにしたいということで、授業が上手な先生の授業を同時に受けられるというのは可能か。アメリカでは校舎を持たない大学があったり、日本でもコロナ禍でICTの利用が進んだりしており、可能性があるかどうかというのが素朴な疑問である。

議長

新型コロナウイルス感染症の影響で、リモート授業は普及しつつある。南砺市で実際に実施していると聞いたことがあるが、事務局にそのような情報はるか。

教育総務課長

リモート授業は技術的に可能。本市では、別の学校の先生がリモートで相談するなど、そういったことも少しずつ進めている。

議長

南砺市では、二つの学校をスクリーンに映し出して授業するような形で実施していたように記憶している。ただ、それは一部の授業であって、全ての授業でリモート授業を行っているわけではない。

教育長

南砺市では、上平小学校、井口小学校、利賀小学校の三つの学校がオンラインで授業をしており、同様に高岡市でも実施している。よさもある反面、そのための打合

せに時間がかかるなど、難しい面もあると聞いている。

砺波市内においても、学校の規模を問わず交流しあうことは子どもたちにとってよい刺激になる。ただし、日常的に全ての授業をオンラインにすることがよいかという点、直接教室で授業を受けた方がいいというのは間違いない。

議長 一部の授業を遠隔にするとしても、対面で授業をする臨場感がないと、教育効果を考えたときになかなか難しい。

教育総務課長 <議事(2) その他参考 説明>

※事務局より、義務教育学校を視察することについて提案した。

委員 砺波市で義務教育学校を考えたときに、最低限1学年1学級でないといけないのか。複式学級でも可能。南砺市のつばき学舎は、いずれ複式学級になる見込み。

委員 廃校になった高校を利用するという話を聞いたことがある。

教育長 高岡市が調整していると聞いている。

議長 富山市は、水橋高校の校舎を利用して義務教育学校をつくっている。

委員 小学校は通学距離が4kmだが、義務教育学校は6kmと長くなっている。小規模校をどうするかという話になったときに、子どもを増やすか統廃合をするかという選択肢しかないと考えていたが、義務教育学校であれば通学距離が長くなるので、いくつか問題が解決できるのではないかと。次回、義務教育学校に視察に行けるということで、ぜひ見てみたい。

教員組織についてわからないことがある。義務教育学校になることによって、教職員の数は縮小となるのか。子どもも少ないが、教員もいないという認識なので、教えていただきたい。

教育長 義務教育学校になると、校長が一人になり一人減るが、その分の席は教諭になるため、トータルの人数は全く変わらない。

委員 先生が足りないという認識だが、義務教育学校になることによって、それが軽減されるのか。

議長 例えば、音楽の先生が小中両方の免許を所持していれば、小中両方の授業をできるため一人分空きができ、別の教科の教員を連れてくることは可能。

教育長 先生の数については、A小学校とB中学校があるとして、A小学校に10人、B中学校に10人であれば、合わせたとしても20人は変わらない。校長が1人になるため、その分教諭が1人増える。養護教諭や事務職員は2人で変わらない。

議長がおっしゃったように、中学校の音楽の先生が小学校の音楽の授業で専科指導ができるというメリットはある。体育や英語でも同様。県内の義務教育学校では、実際にこのようなことを行っている。

ただし、義務教育学校にならなくても、高岡市のように小中一貫校になっていて、隣接する学校同士で、少し離れてはいるが学校を行き来し、英語の指導をしているところもある。

委員 専門の先生が特に不足しているという認識でおり、音楽や美術の先生が小学校も中学校も教えられるのであれば、解消できるのではないかと思います。質問した。解消できるということですか。

議長 基本的に小学校はクラス担任制であり、全ての教科を教えるということが前提になっている。ただ、一部の学校では専科の先生が配置されている学校もある。義務教育学校になることで、それまで中学校で専門教科を教えていた先生が、小学校においても専科で教えることが可能になるということ。

教育長 技術科や家庭科の教員は絶対数が足りないなので、解消はしない。

委員	<p>般若中学校や庄川中学校は、将来的に1学年1クラスになる。小学校の場合は6学年あり、教員の数は6学年分確保できるが、中学校の場合は3学年である。3学年が1クラスずつということになると、どうしても先生の数は学級数に応じて配置されることになるので非常に少なくなり、大変なことになる。</p> <p>ある中学校では、教務主任が学年主任をしている。あるいは、保健主事と学年主任を兼ねている。1学年3クラスの規模であればあり得ない校務分掌である。小さい規模の学校では、担任をし、学年主任をし、さらに別の校務分掌を担って部活動もするという状況である。夜10時まで明かりが付いており、朝は7時半から生徒の街頭指導をしている。生徒のために過酷なサービス残業に日々明け暮れているという実態を聞く。そういう状況が、いずれ砺波市にもやってくる。このようなことを考えると、小中一貫校というものを考えることは必要になってくるとわかる。</p> <p>一方で、中高一貫校というものがあるが、その多くはあまりうまくいっていない。特に富山県では、中高一貫校の試みは何度かされてきたが、結局は実現しない状態にある。中学校の地域性と、高校の県立学校としての生徒募集の形態等もあり、富山県では中高一貫校というものがうまくいかなかった。この中高一貫校がうまくいかないという流れの中で、小中一貫校はどうか。視察でその実態を見てみたいと思うが、簡単にくっつけていいという問題ではない。</p> <p>小学校と中学校を単にくっつけばいいというわけではない。南砺市は複数担任制というものを始めた。賛否両論あるが、様々な面で考えていかなければならないことがたくさんある。</p>
議長	<p>事務局から義務教育学校を視察してはどうかという提案があり、それに対してぜひ見てみたいという意見が多くありました。その方向で進めてよろしいでしょうか。</p>
議長	<p>それでは、義務教育学校の視察も含めて今後検討いただくことにします。</p> <p>本日予定されておりました議事については終了いたしました。本日はこれで議論を終わりたいと存じます。たくさんのご意見ありがとうございました。</p>
教育総務課長	<p>次回の委員会については、義務教育学校の視察を検討させていただきたいと存じます。第5回委員会は10月頃を予定しています。</p>
教育長	<p><閉会あいさつ></p> <p>委員長をはじめ、各委員の皆様にはご多用の中お集まりいただき、様々な立場から貴重なご意見を賜りましたことを深く感謝を申し上げます。</p> <p>1学年1学級は寂しい、かわいそうという子どもの立場、あるいは地域の特性を考えるとということ、そして教員の職場環境という視点もございました。また、市として学校選択制や親の働き方といった視点も考えて欲しい、校区割りの変更という選択もあるのではないか等、多様な意見を頂戴しました。</p> <p>その中で、教育の質という視点がありました。安心して子育てができるという子どもの教育環境をしっかりと整えていくというのが、砺波市の考えでございます。学校長をしていたときに、東京から転入してきたお子さんが、保護者の職場は隣の市でしたが、砺波市に住まれて砺波市の学校に通われました。つまり、いいように解釈をすれば、砺波市の学校を選んでいただけたということです。教育の質というのは、言葉なりで伝わっていくものであります。ですから、とにかく子どもの視点で、子どもたちにとって何がいいかということを中心に考えながら、教育の質を落とさないようにするために、そして地域の皆さんの多面的な意見をお伺いしながら、今後も学校のあり方について検討して参りたいと存じますので、引き続きよろしく願いいたします。本日はどうもありがとうございました。</p>

